［概要］

近年，日本の各地で集中豪雨に伴う洪水，浸水被害が起こっている．そうした被害を低減するため，ハード防災対策だけでなく，住民の防災意識の向上や情報伝達媒体の整備などのソフト防災対策の重要性が指摘されている．住民の防災意識の向上には，住民の防災意識の現状を把握することが必要であり，防災意識は地域特性によって差が生まれることがある．そこで本研究では，洪水による大きな浸水想定がされている地域と浸水想定がほとんどされていない地域の住民の防災意識の差異や発生要因を明らかにすることを目的とし，両地域の住民の防災意識を比較した．調査の結果，浸水想定がされている犬島新町の住民のほうが水害に対して不安を感じていたり現住地を危険だと思っている人が多いことが明らかとなった．これらの差異は地形やハザードマップにより現住地の危険性を認識したことが主な要因であると推測される．また，既存研究でも示されてきたように，洪水ハザードマップの認知が防災意識の向上につながっていることが明らかとなった．

キーワード：防災意識，地域比較，洪水ハザードマップ